サカタのタネ

気象変化への対応強化

北海道研究農場で新品種開発

サカタのタネ（横浜市都筑区）は、北海道東神楽町の北海道研究農場で「花・野菜見学会」を開催し、JA、種苗店、流通業者、マスコミなど約200人が来場した。

産地の高齢化や人手不足を受け、省力化を重視した品種、気象変化に対応する品種などが紹介された。昨年8月、3つの台風が北海道に上陸し、大規模な農業被害が発生。「えぞつゆ」と呼ばれる長雨もあり、今年も日照不足による被害が大きくなっている。そのため、品種の特性による対策が求められている。

北海道研究農場で主な育種を行った新品種が、カボチャ「ブラックのジョー」。黒皮の大玉種で、着果性に優れ、多収性を持つ。収穫間際まで葉を保ち、日焼け果が発生しにくい。貯蔵における黒皮の色が劣化しづらく、商品価値が持続する。調理面でも果皮がカットしやすく、ペーストやスープなどの加工にも適している。果肉の食感はなめらかで上品な甘みがある。

トマトでは、大玉の新品種「麗月」を推奨。道内では、JAむかわ（鵡川町）で導入されている。夏秋向き品種で道産トマトの栽培期に適合。裂果に強く秀品率が高い。葉かび病・斑点病に抵抗性がある。生育後半まで安定した着果性を備えており多収性が見込める。樹上での軟果も遅いため、収穫のタイミングを人的都合に合わせやすい。極硬玉のため棚もちがよく、長距離の輸送に耐える。

トウモロコシでは、極めて倒伏に強い「ゴールドラッシュ90」のタコ足状の根張りを説明。北海道の主力であるバイカラー種では「SK4—027」を推奨。高食味とボリュームを兼ね備え、しなびにも強い。

ハーベスターによる実演ではキャベツの収穫が行われ、機械収穫向きの品種も紹介された。茎の伸び方や玉の形状など、機械刃が玉を傷つけることなく均一に収穫できる。

北海道研究農場は、北海道での育種や親系統の選抜をすることで、道内の産地に適した品種を選抜・生産するだけでなく、気象条件が似ている北米や北欧州への輸出に適応する品種を送り出すことを目的としている。

（萬谷利久子）

（上）道産トマトの夏期栽培に適合する「麗月」の圃場（下）「黒皮の大玉カボチャ「ブラックのジョー」